

**ルイ14世** 位1643-1715 の戦争

宰相マザランの死(1661)で親政を始めたルイ14世(「太陽王」)は、**自然国境説**を唱えて、**侵略戦争**を繰り返し、周囲の国は連合して抵抗した。また、度重なる戦争は**財政窮乏**を招いた。下の太線で囲まれた部分は、ルイ14世が起こした戦争である。イギリスの名誉革命後に始まった【1: 1688-97 アウクスブルク同盟戦争とも言うを端緒として、英仏は約100年にわたる【2: 】とも呼ばれる長い断続的な戦争状態に突入した。植民地と世界商業の支配権をめぐる戦争であった。18世紀には経済覇権をめぐる英仏の抗争は激化し、ファルツ継承戦争以降のヨーロッパで起きた戦争は必ず植民地での戦争を伴った。【1】はプファルツ継承戦争とも言う。ドイツ語Pfaの発音は難しい。

南ネーデルラント継承戦争 1667-68	オランダ侵略戦争 1672-78
ルイ14世がスペイン領南ネーデルラントの継承権を主張。イギリス・オランダに阻止され、若干の領土を得たのみ。アーヘンの和約(1668)	左記の戦争の時、オランダが妨害したことに対する復讐。イギリスとハプスブルク家がオランダを支援。若干の領土を得たのみ。ナイメーヘン和約(1678)

**イギリスとフランスとの抗争(第二次英仏百年戦争)** この表は何度か再掲する。

ヨーロッパでの呼称	ファルツ継承戦争 1688-97	スペイン継承戦争 1701-13(14)	オーストリア継承戦争 1740-48	七年戦争 1756-63
植民地での	ウィリアム王戦争	アン女王戦争	ジョージ王戦争	フレンチ=インディアン戦争
本来の戦争の趣旨	ルイ14世、ドイツのファルツ選帝侯の継承権を主張。	ルイ14世、孫フェリペのスペイン王家継承権を主張。	マリア=テレジアのハプスブルク家継承に反対。	外交革命で孤立したプロイセンがイギリスの援助でフランスを含むオーストリア陣営に宣戦。
結末	フランスは得るところなし。	フェリペはスペイン王になった。	マリア=テレジアのオーストリア王位継承を認める。	イギリスは北米のフランス領の大半を得る。ドイツはシュレジエンを確保。
講和条約	ライスウィク和約 1697	ユトレヒト条約 1713 ラシュタット条約 1714	アーヘン和約 1748	パリ条約 1763 フべルトゥスブルク条約 1763
フランス国王	ルイ14世		ルイ15世	

上の表は**最小限の情報**であり、世界史で一般受験する人は、完全に覚えてください。  
 アーヘン(の)和約は2つある。普通は1668年ではなく1748年(オーストリア継承戦争)のを指す。「の」の有無で区別する訳ではない。パリ条約は1763年を最初に主なものだけでも7つもある。

**ファルツ継承戦争** 1688-97 ルイ14世が起こした侵略戦争

- 1) ルイ14世がドイツの**ファルツ選帝侯領**の継承権を主張して起こした戦争。神聖ローマ皇帝が各国とアウクスブルク同盟を結んで対抗したため、得るところなくライスウィク和約(1697)で終結した。
- 2) この時、フランスとイギリスは初めて植民地で抗争した。これを【3: 】という。1697年、フランスはニューファンドランドを占領したがライスウィク和約で返還した。

ライスウィク和約(1697): フランスと {イギリス・スペイン・オランダ・ドイツ} 間の和約。フランス(ルイ14世)は占領地の大部分を返還。アルザス、ポンディシエリなどは確保した。また、ウィレムをイギリス王として認めた。ライスウィクはハーグ南方の都市。

《頻出》1521年、「法律の保護」を失ったルターを城に保護したのは**ザクセン選帝侯フリードリヒ**。これをファルツ伯と間違えさせる問題が出ている。注意しよう。

選帝侯とはドイツ皇帝選出権を持つ聖俗の有力諸侯である。1356年の金印勅書の規定で次の7人に限られたが、後には追加された。・・・マインツ、トリール、ケルンの三大司教、ベーメン王、ブランデンブルク伯、ザクセン公、ファルツ伯の四大諸侯。

**スペイン継承戦争** 1701-13

- 1) ルイ14世は親政開始以前のピレネー条約(1659)でスペイン王女を后としていた。スペインではカルロス2世の死で王家たるスペイン・ハプスブルク家が1700年に断絶した。ルイ14世は、孫の【4: 】をスペイン王フェリペ5世位1700-24, 1724-46 ※として即位させた。これに**反対するオーストリアにイギリス・オランダが同盟**し、フランス・スペイン連合軍と戦争した。

※フェリペ5世の「位1700-24, 1724-46」とは何だろう。フェリペ5世はフランス王位継承権を得ようと1724年、子のルイス1世にスペイン王位を譲ったが、ルイス1世が数ヶ月で没したためすぐに復位したので二度国王となった。ポーランド継承戦争、オーストリア継承戦争に参加、中央集権化を推進。

- 2) 同時にインドと北アメリカでは、イギリスとフランスが戦争した。これはイギリス女王の名を冠して【5: 】と呼ぶ。フランスは孤立して苦戦を続けた。
- 3) この戦争は、1713年の【6: 】《頻出》で決着した。この条約は重要である。
  - ①列国はルイ14世の孫の**フェリペが、フェリペ5世としてスペイン王家を継承**することを認めるが、フランスとの合邦は永久に認めない。しかし、次の③のようにフランスの失ったものは大きかった。この戦争の実質的勝者はイギリスである。
  - ②ジブラルタル、【7: 】※は、スペイン領からイギリス領になった。

※ 1708年、イギリス海軍に占領された。現在の呼称はメノルカ島。

ミノルカ島（現「メノルカ島」）の中心都市マオンは「マヨネーズ」の語源とされている。舞台はミノルカ島、時代はこのスペイン継承戦争ではなく七年戦争（1756-63）。ミノルカ島のマオンはイギリス海軍の拠点で、1756年、ルイ15世時代の宰相兼元帥であったリシュリュー公爵率いるフランス軍がマオンにいたイギリス海軍を撃破した。これがミノルカ島の海戦。戦争中だが空腹を感じたりシュリュー公爵が、戦火を避けて休業中の料理屋を無理やり開けさせ作らせた料理のソースを非常に気に入ったか、フランス人がどんだけグルメか、という自慢話も兼ねている。この知識は2002年クイズ番組「ミリオンエア」で出題された。問題 調味料「マヨネーズ」の名前の語源となったものはどれ？A：海の名前、B：町の名前、C：人の名前、D：山の名前。正解はBだが、Cと答えて650万円損をした出演者がCも有力説だとして提訴した。実際、確かにCも有力説（開発したシェフ、将軍または貴族の名）である。静岡地裁沼津支部は2003年「正解設定権は放送局にある」として原告の請求を棄却した。この島は1782年、スペインが奪還。1802年アミアンの和約で正式にスペイン領となり現在に至る。

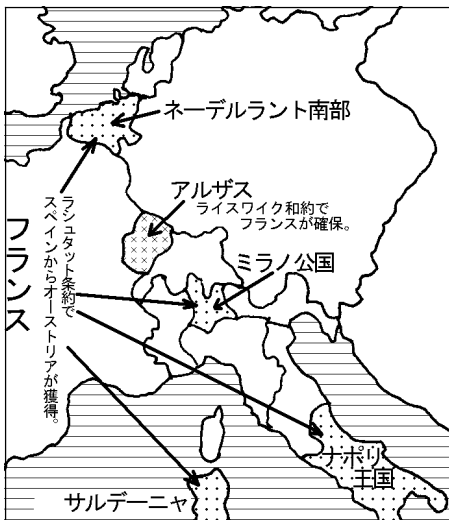
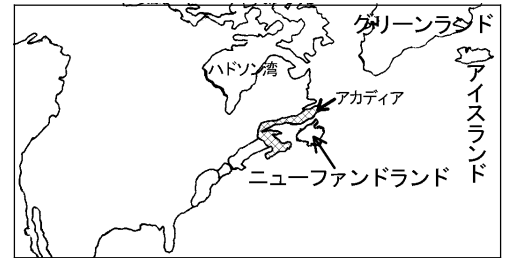


③ ハドソン湾地方、ニューファンドランド、アカディアは、フランス領からイギリス領になった。

④ 【8: 】（奴隷などの貿易特権、「奴隷供給権」とも訳す）は、スペインからイギリスのものになった。これは非常に重要な知識。

4) スペイン継承戦争を終わらせるための条約は、あまり知られていないが、もう一つあった。ラシュタット条約（1714）※である。それは、フランス国王ルイ14世と神聖ローマ皇帝カール6世との間で締結された。

※ 12津田塾、08K、06近畿大などでは内容を問われた。誤選択肢としての出題多数。



① オーストリアはネーデルラント（南部）のスペイン領を得る。

② オーストリアは、イタリアのスペイン領（ミラノ、ナポリ、サルデーニャ、但しシチリアを除く）を得る。

※ ネーデルラント南部（＝ベルギー）の独立は出題されれば難問となる。

このラシュタット条約（1714）でオーストリア領となる。

ウィーン会議（1815）の結果オランダに併合される。

1830年、オランダから独立。翌1831年承認される。

これを最初に述べるべきだったかも知れない

## ルイ14世はフランスをほぼ完璧なカトリックの国にした

1) ファルツ継承戦争が始まる前である。1685年、ルイ14世はカトリックの立場から、フォンテヌブロー王令を発し、【9: 】※を廃止し、プロテスタント（ユグノー）の信仰の自由を否定した。

※ 復習しよう。1598年、アンリ4世が発した、新教徒に旧教徒とほぼ同等の権利を与え、近代ヨーロッパで最初に個人の信教の自由を認めた画期的な王令。ユグノー戦争は急速に収まった。

2) プロテスタントの信仰の自由の否認に伴って行われた弾圧は、生やさしいものではなかった。教会は破壊し、牧師は国外追放、プロテスタントの学校は閉鎖。プロテスタントの亡命は許されず、彼らの子供にはカトリックの洗礼が強制された。もしプロテスタントとしてとらえられれば財産は没収され、男はガレー船に送られて奴隷として使役され、女は改宗するまで鞭打ちにされるといったものであった。

3) もともとユグノーだったアンリ4世は1598年、カトリックに改宗、これ以降のブルボン家はカトリック側になったが、ユグノーも保護するため「ナントの王令（勅令）」を発し、カトリック勢力の反抗を抑えつつ、ユグノーからも支持を得てきた。この精妙に仕組みられたプロテスタント容認政策を、孫のルイ14世は転換した。実はプロテスタント弾圧は、ルイ13世（リシュリュー）時代も大規模に行われ、信者数も減少して当時は人口のわずか5%程度で、苛酷な弾圧に武力で抗するだけの力を持っていなかった。つまり、プロテスタントの存在を恐れて弾圧したのではなかった。それではこのような苛酷な弾圧、そして対外的な影響も大きい「ナントの王令廃止」を行った意図は何だったのだろうか。実を言うとなんかとは分かっていない。ここでも愛妾が教唆したというミソジニー系逸話もあるが信憑性はない。

4) 数十万のプロテスタントは密かにフランスを逃れ、イングランド、オランダあるいはプロイセンなどに亡命。プロテスタント信仰をもつユグノーには、手工業者（職人）や商人が多かったので、フランスの商工業の発達が疎外されたと言われている。

5) 当然、周辺のプロテスタント諸国に大きな衝撃と脅威を与えた。カトリック諸国でさえローマ教皇でもできないような新教徒弾圧を強行したルイ14世を恐れ、フランスに対する警戒感を高めた。イギリスでは、ルイ14世と提携しているジェームズ2世のカトリック復帰に対する議会の警戒を強め、名誉革命（1688）の伏線となった。また、ルイ14世は同時に新教国オランダへの攻勢を強めていた。1688年にファルツ選帝侯の後継問題を口実に戦争を始めたルイ14世に対して、オランダ総督ウィレム3世はアウクスブルク同盟を結成して抵抗した。この戦争には宗教戦争の要素もあった。

6) ナントの王令は新旧両教徒の政治的妥協であって、宗教的対立は温存され、第二のユグノー戦争はいつでも起こりえた。ルイ14世は、カトリックに統一することで、対立の根源を絶ちフランスとしての一体感を強めようとしたのであろう。プロテスタントは一扫され、フランスはほぼ完璧なカトリック国となったが、同時に国際的に孤立した。1715年にルイ14世は亡くなり、ルイ15世に継承され、フランスは経済的混乱から脱却したが、彼には政治的指導力がなかった。